【実践報告】

富田林市かがりの郷「親子ふれあい体操」教室

岡　　みゆき*

キーワード：学生　地域貢献　連携　活性化　広報

はじめに

本大学の所在地である富田林市「コミュニティセンターかがりの郷」から、かがりの郷の活性化を図るため教育学部幼児教育専攻・幼児の運動遊びを研究するゼミである私たちと協働で事業を行いたいという企画が 2018 年秋に持ち込まれた。本大学では教育・文化・環境と様々な分野で協働し、地域社会に貢献するため、富田林市と連携協力に関する基本協定を締結している。お互いが有する知的財産、歴史的・文化的資源を生かし、多様な事業・行事を企画・運営して地域の活性化を図り、豊かな街づくりに取り組むとしており、その一助にもなりうると考え引き受けることにした。

教員としては、この企画を、かがりの郷と協働で行い学生の実践力を鍛える場を作りだせるという期待感を持ち、前向きに検討することとした。学生にできる社会貢献・地域貢献として近隣の幼稚園や保育園に出向き運動遊びの実践を行わせてもらったりしていたが、幼稚園や保育所の過密なスケジュールもあり、単発での指導として出向くというものが多く、継続した指導実践を行っていなかった。そこで、若い親世代と乳幼児に、かがりの郷を知ってもらい活用してもらう（コミュニティセンターかがりの郷の要望）、年間を通した継続的な指導を行うこと（学生の変化、参加者の子ども達保護者たちの変化を見ることができるのではないかという期待）の 2 つを目的として、月 1 回、第 2 土曜日 10 : 30-11 : 30、1 年間 10 回、「親子ふれあい体操」教室の企画を行い、実践するに至った。そこで見えた、広報活動の難しさ、社会との連携、学生の成長などをまとめる。

かがりの郷とは

かがりの郷の正式名称は富田林市立コミュニティーセンターかがりの郷である（以下、かが

*大阪大谷大学教育学部

りの郷)。富田林市の中東部で河南町と隣接した、ゆったりとした丘陵地域にある。現在、行っている事業は、高齢者に関する地域の総合相談窓口としての第2圏域地域包括支援センター、子育ての悩み相談や仲間づくりとしての富田林市つどいの広場事業、貸し教室などがある。子どもから高齢者まで、世代を超えた交流が出来るように、富田林市内の公共施設で初めて「ハートビル法[1)]」の認定を受け平成13年7月に開設された。誰もが利用しやすく、憩いの場となるように建設されている。平成31年1月末、社会情勢及び時代の変化の中で、一定の役割を果たすことができたと認識し高齢者に向けた通所介護・通所介護相当サービスの事業は廃止された。廃止によりできた空きスペースを有効利用し、活性化を図ろうと考えているということであった。若い親世代と子どもに、かがりの郷の活用を促したいという想いに、幼児の運動遊びを研究するゼミとして「親子ふれあい体操」を提示し、その指導を学生が行うことになった（写真1、2、3)。

教員から学生への課題

岡ゼミ4回生、12名を3チーム4名ずつに編成し、1チーム4名がリーダーとなり指導を行う。他の2チーム8名は、スタッフとして用具の出し入れや、音響係、受付、記録（カメラ撮影）を行いリーダーチームが円滑に指導を行えるようにサポートする。1チームごとに毎回、運動遊びの指導案（1時間分を作成し、メールで何度か教員と、やり取りをしたのち修正したもの）を作成しロールプレイ（大学内でゼミ生を親子に見立て実践）を行う。「親子ふれあい体操」実践後の振り返りやミーティング、報告書作成を課題とした（表1）（写真7、8)。

表1　日程と実践リーダー記録

回数	日時	指導者	参加者	学生	総参加者数
1	2019年4月13日（土）	教員	13名	11名	24名
2	5月11日（土）	1グループ－1回目	9名	12名	21名
3	6月8日（土）	2グループ－1回目	6名	12名	18名
4	7月13日（土）	3グループ－1回目	10名	10名	20名
5	9月14日（土）	1グループ－2回目	11名	12名	23名
6	10月12日（土）	台風のため中止			
7	11月2日（土）	2グループ－2回目	9名	10名	19名
8	12月14日（土）	3グループ－2回目	8名	12名	20名
9	2020年1月11日（土）	1グループ－3回目	7名	5名	12名
10	2月8日（土）	2グループ－3回目	11名	11名	22名

写真 1　ふれあい体操

写真 2　円形綱引き

写真 3　サーキット

はじめての指導では緊張した面持ちで、棒立ち・肩に力が入っている学生の姿が見受けられる（写真 1、2、3）。

広報

参加者募集については「広報　富田林」の掲載、かがりの郷職員の方による広報で参加者募集が行われた。表 1 からもわかるように、参加者数の増加がなく、参加者数を増やすということが課題となった。学生側も参加者増加につなげようと色々と話し合い Twitter やフェースブックを利用して広報を行うなどの試みを重ねた。ケーブル TV、J : com の取材があり、その後ケーブル TV で「親子ふれあい体操」の放映も行われたが、反応は少なかった。

学生が経験した保育実習においては、広報や参加者募集の難しさという課題に直面したことはなかったと思われる。保育者になった場合、園児募集など、PR の必要な場面があると考えると、経験として、学生が参加者数を増やすという課題を突き付けられ、色々な方法を考え実行してみたことは意味深かったと感じる。また、TV 取材でインタビューされ、幼児期の運動の重要性や愛着形成について簡潔に答える経験、その学生が TV にクローズアップされ映し出されるという経験も貴重で楽しいものだった。

リピーター

初回から参加を続けてくれている親子が 2 組あった。そのことが、学生、教員側にも参加者増加に至らなかった中でも救いであった。学生の指導内容が悪いわけではないという気持ちを持たせてくれた。初回からではないが継続して何度か来てくれる親子や、おじいちゃんおばあちゃんもついてきてくれる親子があり、学生のフレッシュな指導が、家族みんなで楽しみに来ているという雰囲気を許し、ほんわかしたムードをつくりだしているようであった。

かがりの郷から

学生が卒論に取り上げた「学生による地域貢献」としてのインタビューから、かがりの郷職員の回答を見てみると

1．この「親子ふれあい体操」はかがりの郷の活性化に役立ったか。

みなさん（学生）の成長にもそうだ（役立った）と思うんですけど、かがりの郷にとっては、みなさんのような若い世代の方々が来てくれるだけで、土曜日は活気づいていました。参加してくださる世代の方々にも、ここ、かがりの郷を知っていただくきっかけになったと思います。

2．かがりの郷での活動を「学生による社会貢献である」と考えていたが社会貢献になっていたと思うか。

はい。日頃の学びの実践の場として来ていただいたと思うんですけど、みなさんの活力を、目に見える体操という形で実践していただき働きかけてくれていたと思います。他に、目に見えない地域貢献もあったと思うので、とても良かったと思います。

3．かがりの郷職員の立場から、学生の更なる社会貢献につながると思うことをアドバイスしてもらいたい。

大学の中だけで学ぶっていうよりかは、こうやって地域にでて、住民の人と若い世代の方に向けての実践をされる場が、もっとあってもいいのかなと思いました。

かがりの郷職員の方からは、「かがりの郷の活性化に役立った。」という、あたたかい意見をいただいた。若い親子の参加人数が増えたわけではない。参加していた親子の中には、かがりの郷のことを、「親子ふれあい体操」をきっかけに知った方もいるという。ことからは、少しの広報につながった部分は、あったのかもしれないと推測された。かがりの郷としては、たくさんの若い親子が訪れ「親子ふれあい体操」に参加してくれ活性化することが目標であったと思われる。参加者が増えなかったにもかかわらず、あたたかい評価が、いただけたのは「参加者は少なかったけれど、毎月 1 回、今まで来ることが少なかった大学生が大勢で押しかけ活動を行うことに、活性化を感じてもらえたのではないか」と考える。学生が 12 名、相談しながらリハーサルをし、運動遊びを楽しそうに行う姿が、かがりの郷の土曜日の雰囲気を変えたとも感じている。学生にとっては学校生活の中だけでなく地域にでて実践を行い、成長できる機会や場を持つことができた。地域の方と関わり「親子ふれあい体操」の指導ができたことはとても貴重な経験であったと感じている。

写真 4　息の合ったペープサート

写真 5　堂々とした指導

写真 6　緊張しながらの抱っこ

写真 7　指導案

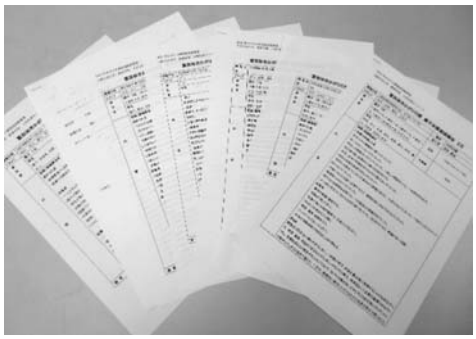

写真 8　報告書

まとめ

4 月の時点で学生は、参加者に声かけをすることさえも緊張した面持ちであった。指導はぎこちなく、台本を棒読みするような雰囲気の指導であった。教員側からの課題である指導実践前の指導案作成とロールプレイも負担感と不安感が大きかったと感じる。毎回、実践を行った後、学生同士で振り返りを行い、よかった点と今後の改善点を討論することも精神的に圧迫感を感じていたと思われる。その後、報告書まで提出させられるという、大いに鬱々とした部分もあったと感じている。それをやりぬいたったという自信が、12 月からの指導では現れた。参加者と一体感をもって、運動遊びの素晴らしい指導を行うまでに成長した。素晴らしいの意味は、親子の様子を見て、それに応じた臨機応変な指導ができていたことである（写真 4、5、6）。実際、毎回、違った月齢の子ども達が参加し、参加人数も一定ではない。運動遊びで身体活動を行うことだけではなく、その重要性について理論的な部分も保護者に伝えられるようになっていた。学生自身も、そのことを感じ取っており、振り返りでは「今までやってきた中で、今回の指導（最終回）は楽しかった。」と述べている。教員の厳しい視線で、細かい指導に笑顔で応えてくれていた学生の、真のやさしさに気づかされた指導に出会った。この活動は、教員にとっても学生の成長を社会という場で感じ取ることができ、有意義であった。これからも、子ども達の明るい未来のために、この経験を糧にして頑張ってもらいたい。

写真 9　参加者の皆さんと記念写真

謝辞

この様な場を提供してくださった「かがりの郷」、職員の方、参加して下さった親子のみなさんに感謝申し上げます。

注

1）ハートビル法とは、高齢者や身体障がい者などの自立と積極的な社会参加を促すため、不特定多数の人が利用する特定の建築物などについて、高齢者や身体障がい者などが円滑に利用できるような整備を促進し、バリアフリー化を義務づける法律である。